

# 国 語

( 200 点 )  
( 80 分 )

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、44 ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

### ① 受験番号欄

受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

### ② 氏名欄、試験場コード欄

氏名・フリガナ及び試験場コード(数字)を記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
1 0	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。



国

語

(解答番号)

1

～

36

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

(注1) フロイトによれば、人間の自己愛は過去に三度ほど大きな痛手をこうむったことがあるという。一度目は、コペルニクスの地動説によつて地球が天体宇宙の中心から追放されたときに、二度目は、ダーウィンの進化論によつて人類が動物世界の中心から追放されたときに、そして三度目は、フロイト自身の無意識の発見によつて自己意識が人間の心的世界の中心から追放されたときに。

しかしながら実は、人間の自己愛には、すくなくとももうひとつ、フロイトが語らなかつた傷が秘められている。だが、それがどのような傷であるかを語るためには、ここでいささか回り道をして、まずは「ヴェニスの商人」について語らなければならない。

(注2) ヴェニスの商人——それは、人類の歴史の中で「ノアの洪水以前」から存在していた商業資本主義の体現者のことである。海をはるかへだてた中国やインドやペルシャまで航海をして絹やコシヨウや絨毯を安く買い、ヨーロッパに持ちかえつて高く売らさばく。遠隔地とヨーロッパとのあいだに存在する価格の差異が、莫大な利潤としてかれの手に残ることになる。すなわち、ヴェニスの商人が体現している商業資本主義とは、地理的に離れたふたつの国のあいだの価格の差異を媒介して利潤を生み出す方法である。ここでは、利潤は差異から生まれている。

だが、A 経済学という学問は、まさに、このヴェニスの商人を抹殺することから出発した。

年々の労働こそ、いずれの国においても、年々の生活のために消費されるあらゆる必需品と有用な物資を本源的に供給する基金であり、この必需品と有用な物資は、つねに国民の労働の直接の生産物であるか、またはそれと交換に他の国から輸入したものである。

『国富論』の冒頭にあるこのアダム・スミスの言葉は、一国の富の増大のためには外国貿易からの利潤を貨幣のかたちでチクセキしなければならぬとする、重商主義者に対する挑戦状にほかならない。スミスは、一国の富の眞の創造者を、遠隔地との価格の差異を媒介して利潤をかせぐ商業資本的活動にではなく、勃興ぼつこうしつつある産業資本主義のもとで汗水たらして労働する人間に見いだしたのである。それは、経済学における「人間主義宣言」であり、これ以後、経済学は「人間」を中心として展開されることになった。

たとえば、<sup>(注4)</sup>リカードやマルクスは、スミスのこの人間主義宣言を、あらゆる商品の交換価値はその生産に必要な労働量によって規定されるという労働価値説として定式化した。

実際、リカードやマルクスの眼前で進行しつつあつた産業革命は、工場制度による大量生産を可能にし、一人の労働者が生産しうる商品の価値(労働生産性)はその労働者がみずからの生活を維持していくのに必要な消費財の価値(実質賃金率)を大きく上回るようになったのである。労働者が生産するこの剰余価値——それが、かれらが見いだした産業資本主義における利潤の源泉なのであつた。もちろん、この利潤は産業資本家によつて搾取されてしまうものではあるが、リカードやマルクスはその源泉をあくまでも労働する主体としての人間にもとめていたのである。

だが、産業革命から二百五十年を経た今日、ポスト産業資本主義の名のもとに、旧来の産業資本主義の急速な変貌へんぼうが伝えられている。ポスト産業資本主義——それは、加工食品や繊維製品や機械製品や化学製品のような実体的な工業生産物にかわつて、

**B** 技術、通信、文化、広告、教育、娯楽といつたいわば情報そのものを商品化する新たな資本主義の形態であるという。そして、このポスト産業資本主義といわれる事態の喧騒けんそうのなかに、われわれは、ふたたびヴェニスの商人の影を見いだすのである。

なぜならば、商品としての情報の価値とは、まさに差異そのものが生み出す価値のことだからである。事実、すべての人間が共有している情報とは、その獲得のためにどれだけ労力がかかつたとしても、商品としては無価値である。逆に、ある情報が商品として高価に売れるのは、それを利用するひとが他のひととは異なつたことが出来るようになるからであり、それはその情報の開発のためにどれほど多くの労働が投入されたかには無関係なのである。

まさに、ここでも差異が価格を作り出し、したがって、差異が利潤を生み出す。それは、あのヴェニス商人の資本主義とまったく同じ原理にはかならない。すなわち、このポスト産業資本主義のなかでも、労働する主体としての人間は、商品の価値の創造者としても、一国の富の創造者としても、もはやその場所をもっていないのである。

いや、さらに言うならば、伝統的な経済学の独壇場であるべきあの産業資本主義社会のなかにおいても、われわれは、抹殺されてきたはずのヴェニスの商人の巨大な亡霊を発見しうるのである。

産業資本主義——それも、実は、ひとつの遠隔地貿易によって成立している経済機構であったのである。ただし、産業資本主義にとっての遠隔地とは、海のかなたの異国ではなく、一国の内側にある農村のことなのである。

産業資本主義の時代、国内の農村にはいまだに共同体的な相互<sup>(イ)</sup>フジョの原理によって維持されている多数の人口が<sup>(ウ)</sup>タイリユウしていた。そして、この農村における過剰人口の存在が、工場労働者の生産性の飛躍的な上昇にもかかわらず、彼らが受け取る実質賃金率の水準を低く抑えることになったのである。たとえ工場労働者の不足によってその実質賃金率が上昇しはじめても、農村からただちに人口が都市に流れだし、そこで賃金率を引き下げってしまうのである。

それゆえ、都市の産業資本家は、都市にいながらにして、あたかも遠隔地交易に<sup>(エ)</sup>ジユウジしている商業資本家のように、労働生産性と実質賃金率という二つの異なった価値体系の差異を媒介できることになる。もちろん、そのあいだの差異が、利潤として彼らの手元に残ることになる。これが産業資本主義の利潤創出の秘密であり、それはいかに異質に見えようとも、利潤は差異から生まれてくるというあのヴェニスの商人の資本主義とまったく同じ原理にもとづくものなのである。

この産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異は、歴史的に長らく安定していた。農村が膨大な過剰人口を抱えていたからである。そして、この差異の歴史的な安定性が、その背後に「人間」という主体の存在を測定してしまう、<sup>C</sup>「伝統的な経済学の「錯覚」を許してしまったのである。」

かつてマルクスは、人間と人間との社会的な関係によってつくりだされる商品の価値が、商品そのものの価値として実体化されてしまう認識論的錯覚を、商品の物神化と名付けた。その意味で、差異性という抽象的な関係の背後にリカードやマルクス自

身が措定してきた主体としての「人間」とは、まさに物神化、いや人神化の産物にほかならないのである。

差異は差異にすぎない。産業革命から二百五十年、多くの先進資本主義国において、無尽蔵に見えた農村における過剰人口もとうとうコ(オ)カツしてしまった。実質賃金率が上昇しはじめ、もはや労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異を媒介する産業資本主義の原理によつては、利潤を生み出すことが困難になつてきたのである。あたえられた差異を媒介するのではなく、みずから媒介すべき差異を意識的に創りだしていかなければ、利潤が生み出せなくなつてきたのである。その結果が、差異そのものである情報を商品化していく、現在進行中のポスト産業資本主義という喧噪に満ちた事態にほかならない。

差異を媒介して利潤を生み出していたヴェネスの商人 X——あのヴェネスの商人の資本主義こそ、まさに普遍的な資本主義であつたのである。そして、**D**「人間」は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあつたことはなかつた。

(岩井克人「資本主義と『人間』」による)

(注) 1 フロイト——オーストリアの精神医学者(一八五六—一九三九)。精神分析の創始者として知られる。

2 「ヴェネスの商人」——シェークスピアの戯曲『ヴェネスの商人』をふまえている。

3 ノアの洪水——ノアとその家族が方舟はたかぶねに乗り大洪水の難から逃れる、『旧約聖書』に記されたエピソード。

4 リカード——アダム・スミスと並ぶイギリスの経済学者(一七七二—一八二三)。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

チクセキ

1

- ① ゾウチクしたばかりの家
- ② 原文からのチクゴヤク
- ③ ガンチクのある言葉
- ④ チクバの友との再会
- ⑤ 農耕とボクチクの歴史

(イ)

フジヨ

2

- ① 家族をフヨウする
- ② 遠方にフニンする
- ③ フセキを打つ
- ④ 免許証をコウフする
- ⑤ フソクの事態に備える

(ウ)

タイリユウ

3

- ① 作業がトドコオる
- ② 義務をオコタる
- ③ 口座から振りカえる
- ④ 苦難にタえる
- ⑤ フクロの中に入れる

(エ)

ジュウジ

4

- ① ジュウソク感を得る
- ② フクジュウを強いられる
- ③ アンジュウの地を探す
- ④ 列島をジュウダンする
- ⑤ ユウジュウフダンな態度

(オ)

コカツ

5

- ① 経済にカツリヨクを与える
- ② 勝利をカツボウする
- ③ 大声でイツカツする
- ④ 説明をカツアイする
- ⑤ ホウカツ的な議論を行う



問2 傍線部A「経済学という学問は、まさに、このヴェニス商人を抹殺することから出発した」とあるが、それはどうか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 経済学という学問は、差異を用いて莫大な利潤を得る仕組みを暴き、そうした利潤追求の不当性を糾弾することから始まったということ。
- ② 経済学という学問は、差異を用いて利潤を生み出す産業資本主義の方法を排除し、重商主義に挑戦することから始まったということ。
- ③ 経済学という学問は、差異が利潤をもたらすという認識を退け、人間の労働を富の創出の中心に位置づけることから始まったということ。
- ④ 経済学という学問は、労働する個人が富を得ることを否定し、国家の富を増大させる行為を推進することから始まったということ。
- ⑤ 経済学という学問は、地域間の価格差を利用して利潤を得る行為を批判し、労働者の人権を擁護することから始まったということ。

問3

傍線部B「技術、通信、文化、広告、教育、娯楽といったいわば情報そのものを商品化する新たな資本主義の形態」とある

が、この場合、「情報そのもの」が「商品化」されるとはどのようなことか。その具体的な説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 多くの労力を必要とする工業生産物よりも、開発に多くの労力を前提としない特許や発明といった技術の方が、商品としての価値をもつようになること。
- ② 刻一刻と変動する株価などの情報を、誰もが同時に入手できるようになったことで、通信技術や通信機器が商品としての価値をもつようになること。
- ③ 広告媒体の多様化によって、工業生産物それ自体の創造性や卓越性を広告が正確にうつし出せるようになり、商品としての価値をもつようになること。
- ④ 個人向けに開発された教材や教育プログラムが、情報通信網の発達により一般向けとして広く普及したために、商品としての価値をもつようになること。
- ⑤ 多チャンネル化した有料テレビ放送が提供する多種多様な娯楽のように、各人の好みに応じて視聴される番組が、商品としての価値をもつようになること。

問4 傍線部C「伝統的な経済学の『錯覚』とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〜

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 産業資本主義の時代に、農村から都市に流入した労働者が商品そのものの価値を決定づけたために、伝統的な経済学は、価値を定める主体を富の創造者として実体化してしまったということ。
- ② 産業資本主義の時代に、都市の資本家が農村から雇用される工場労働者を管理していたために、伝統的な経済学は、労働力を管理する主体を富の創造者と仮定してしまったということ。
- ③ 産業資本主義の時代に、大量生産を可能にする工場制度が労働者の生産性を上昇させたために、伝統的な経済学は、大きな剰余価値を生み出す主体を富の創造者と認定してしまったということ。
- ④ 産業資本主義の時代に、都市の資本家が利潤を創出する価値体系の差異を積極的に媒介していたために、伝統的な経済学は、その差異を媒介する主体を利潤の源泉と見なしてしまったということ。
- ⑤ 産業資本主義の時代に、農村の過剰な人口が労働者の生産性と実質賃金率の差異を安定的に支えていたために、伝統的な経済学は、労働する主体を利潤の源泉と認識してしまったということ。

問5 傍線部D『人間』は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあったことはなかったとあるが、それはどう

いうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

① 商業資本主義の時代においては、商業資本主義の体現者としての「ヴェニスの商人」が、遠隔地相互の価格の差異を独占的に媒介することで利潤を生み出していたので、利潤創出に参加できなかった「人間」の自己愛には深い傷が刻印されることになった。

② アダム・スミスは『国富論』において、真の富の創造者を勤勉に労働する人間に見いだし、旧来からの交易システムを成立させていた「ヴェニスの商人」を市場から退場させることで、資本主義が傷つけた「人間」の自己愛を回復させようとした。試みた。

③ 産業資本主義の時代においては、労働する「人間」中心の経済が達成されたように見えたが、そこにも差異を媒介する働きをもった、利潤創出機構としての「ヴェニスの商人」は内在し続けたため、「人間」が主体として資本主義にかかわることはなかった。

④ マルクスはその経済学において、人間相互の関係によってつくりだされた価値が商品そのものの価値として実体化されることを物神化と名付けたが、主体としての「人間」もまた認識論的錯覚のなかで物神化され、資本主義社会における商品となってしまった。

⑤ ポスト産業資本主義の時代においては、希少化した「人間」がもはや利潤の源泉と見なされることはなく、価値や富の中心が情報に移行してしまったために、アダム・スミスの意図した「人間主義宣言」は完全に失効したことが明らかとなった。

問6 この文章の表現について、次の(i)・(ii)の各問いに答えよ。

(i) 波線部Xのダツシユ記号「――」のここでの効果を説明するものとして適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 直前の内容とひと続きであることを示し、語句のくり返しを円滑に導く効果がある。
- ② 表現の間を作って注意を喚起し、筆者の主張を強調する効果がある。
- ③ 直前の語句に注目させ、抽象的な概念についての確認を促す効果がある。
- ④ 直前の語句で立ち止まらせ、断定的な結論の提示を避ける効果がある。

(ii) この文章の構成の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 人間の主体性についての問題を提起することから始まり、経済学の視点から資本主義の歴史を起源にさかのぼって述べ、商業資本主義と産業資本主義を対比し相違点を明確にした後、今後の展開を予測している。
- ② 差異が利潤を生み出すことを本義とする資本主義において、人間が主体的立場になかったことを検証した後、その理由を歴史的背景から分析し、最後に人間の自己愛に関する結論を提示している。
- ③ 人間の自己愛に隠された傷があることを指摘した後で、差異が利潤を生み出すという基本的な資本主義の原理をふまえてその事例の特徴を検証し、最後に冒頭で提起した問題についての見解を述べている。
- ④ 差異が利潤を生み出すという結論から資本主義の構造と人間の関係を検証し、人間の労働を価値の源泉とする経済学の理論にもとづいて、具体的な事例をあげて産業資本主義の問題を演繹的に論じている。

## 第2問

次の文章は、中沢けいの小説『楽隊のうさぎ』の一節である。学校嫌いで引つ込み思案だった克久は、花の木中学校に入学後、勧誘されて吹奏楽部に入り、夏の地区大会さらには県大会をめざして練習づけの毎日を送っていた。以下はそれに続く部分である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

譜面をパートごとに練習して、セクションごとに音として仕上げていくのは、山から石を切り出す作業だが、そのごろした石がようやくしつかりとした石組みになろうとしていた。森勉が細やかに出す指示は、石と石の接続面をびつたりと合わしていく仕事だった。

この日、何度目かで「くじやく」をさらっていた時、克久はばらばらだった音が、一つの音楽にまとまる瞬間を味わった。スラブ風の曲だが、枯れ草の匂いがしたのである。斜めに射す入り陽の光が見えた。それは見たことがないほど広大な広がりを持っていた。(ア) いわく言い難い哀しみが、絡み合う音の底から湧き上がっていた。悔しいとか憎らしいとか、そういういらするような感情は一つもなく、大きな哀しみの中に自分がいるように感じた。つまり、A 音が音楽になろうとしていた。地区大会前日だった。

オーボエの鈴木女史の苦情から有木部長が解放されたのは、地区大会の翌日からだ。一年生にもようやく自分たちが求められているものがどの水準にあるのかが解つたのだ。ベンちゃんが初期の頃は苦勞していた部員の統制は、今では指揮者を煩わせることなく鈴木女史のようなメンバ―で守られているのだから有木部長もそうそう閉口という顔もできなかったが、とにもかくにも苦情を聞かずにすむのは喜ばしい。「音になってない」という森勉の決まり文句をはじめとして、「やる気があるのか」とか「真面目にやれ」とか言われる理由がのみ込めたのだ。B 怒られるたびに内心で「ちゃんとやっつてるじゃないか」とむくれていた気持ちですつかり消えた。

スゴイ学校は他にいくらでもあった。

今年こそは地区から県大会を突破しようという気迫で迫ってくる学校があった。

その中でも、課題曲に「交響的譚詩」<sup>(注5)</sup>を選んだある中学校の演奏は、克久<sup>(注6)</sup>の胸のうさが躍り上がるような音を持っていた。

花の木中学とは音の質が違った。花の木中学はうねる音だ。大海原のうねりのような音を作り出していた。ところが、その学校の音はもつと硬質だった。

「スゲエナ」

有木がつぶやいた隣で克久は掌を握り締めた。

「(イ) 和声理論の権化だ」

密かに音楽理論の勉強を始めていた宗田がそう言い放つのも無理はない。

最初のクラリネットの研ぎ澄ました音は、一本の地平線を見事に引いた。地平線のかなたから進軍してくる騎馬隊がある。木管は風になびく軍旗だ。金管は四肢に充実した筋肉を持つ馬の群れであった。打楽器が全軍を統括し、西へ東へ展開する騎兵をまとめあげていた。

わずか六分間のことはとても思えない。

遠く遠くへ連れ去られた感じた。

克久の目には騎兵たちが大平原に展開する場面がはつきり見えた。宗田の脳髄には宇宙工学で必要とされるような精密機器の設計図が手際良く作製される様子が浮かんでいた。宗田は決して口に出しては言わなかったが、最近、人が人間的なと呼ぶような感情に嫌悪を感じ始めていた。

うんと唸<sup>うな</sup>った川島が、

「負けた」

といった一言ほど全員の感情を代弁している言葉は他になかった。

「完成されているけど、音の厚みには欠けるよ」

「負けた」と言う全員の感情、とりわけ一年生たちの驚きを代弁した川島の一言だけでは、出番を控えていた花の木中学吹奏楽部は気持ちの立て直しはできなかったかもしれない。川島の唸り声は全員の気持ちは代弁していたが、気持ちを向ける方向の指示は持っていなかった。

「完成されているけど、音の厚みには欠けるな」

こんなことを言うOBがいなかったら、自分たちの出番前だということも忘れただろう。

「やっぱり、中学生はね。技術が良くても音の量感には乏しいよ」

「うちはまあ、中学生にしては音の厚みはあるしさ」

現役の生徒の後方の席でOBたちはこんな批評をしていたのだ。昨日まで、鳥の鳴き声みたいに聞こえたOBの言葉が、今日からはちゃんと人間の話し声に聞こえる。

これは克久にとって、驚きに値した。

克久がいちばん間抜けだと感じたのは百合子(注7)だった。なにしろ、地区大会を終わって家に戻って最初に言ったのは次の一言だ。

「やっぱり、強い学校は高い楽器をたくさん持っているのね」

それを言つては、みもふたもない。言つてはならない真実というものは世の中にはある。それに高価な楽器があれば演奏できるというものでもない。演奏する生徒がいて、初めて高価な楽器がものを言うのだなんてことを、克久は百合子に懇切丁寧に説明する親切心はなかった。

「小学生とはぜんぜん違う」

実は百合子も少し興奮気味だったのである。克久には小学校時代は太古の昔、悠久のかなただだったが、百合子にはわずか六カ月前にもならない。だいたい、その頃、(注8)銀行に申し入れた融資の審査がまだ結論が出ていなかった。伊万里いまり焼の皿の並んだテーブルをはさんで恐竜と宇宙飛行士が会話しているという比喩ひゆで良いのかどうか。そのくらい、時の流れの感覚が食い違ってい



た。これだから中学生は難しい。百合子がうれしい時に使う古典柄の伊万里が照れくさそうに華やいでいた。この皿はうれしい時も出番だが、時には出来合いのロールキャベツを立派に見せるためにお呼びがかかることもあった。

翌日から一年生は「やる気あるのか」と上級生に言われなくなった。帰宅は毎日九時を過ぎた。

県大会の前日はさすがに七時前に克久も家に帰って来た。「ただいま」と戻った姿を見た百合子はたちまち全てを了解した。了解したから、トンカツなどを揚げたことを後悔した。大会にカツなんて、克久流に言えば「かなりサムイ」しゃれたった。

「ベンちゃんが今日は早く風呂に入って寝ろってさ」

「そうなんだ」

百合子はこんな克久は見たことがなかった。なんでもなく、普通そうにしているけれども、全身に緊張があふれていた。それは風呂場で見せる不機嫌な緊張感とはまるで違った。ここに何か、一つでも余分なものを置いたら、ぷつんと糸が切れる。そういう種類の緊張感だった。

彼は全身で、いつもの夜と同じように自然にしてほしいと語っている。「明日は大会だから、闘いにカツで、トンカツ」なんて駄ジャレは禁物。

もつとスマートな対応を要求していたのである。会話だって、音楽の話もダメなら、大会の話題もダメであった。

そういうことが百合子にも解る顔をしていた。こんなに穏やかな精神統一のできた息子の顔を見るのは初めてだ。一人前の男である。誇りに満ちていた。

もちろん、彼の築き上げた誇りは輝かしいと同時に危ういものだ。

「お風呂、どうだった」

「どうだったって？」

「だから湯加減は」

音楽でもなければ、大会の話でもない話題を探そうとすると、何も頭に浮かばない。湯加減と言われたって、家の風呂は温度

調整のできるガス湯沸かし器だから、良いも悪いもないのである。

「今日、いい天気だったでしょ」

「毎日、暑くてね」

「……」

練習も暑くて大変ねと言いかけて百合子は黙った。

「……」

克久も何か言いかけたのだが、目をぱちくりさせて、口へトンカツを放り込んでしまった。

「あのね、仕事の帰りに駅のホームからうちの方を見たら、夕陽が斜めに射して、きれいだった」

「そう。……」

なんだか、ぎこちない。克久も何か言おうとするのだが、大会に関係のない話というのは探しても見つからない。それでも、その話はしたくなかった。この平穏な気持ちを大事に、そっと、明日の朝までしまっておきたかった。

**C** 初めて会った恋人同士のような変な緊張感。それにしても、百合子も克久もお互いを知り過ぎていた。百合子は「こいつは生まれる前から知っているのに」とおかしくて仕方がなかった。

「……」

改めて話そうとすると、息子と話せる雑談って、あまり無いものだなと百合子は妙に感心した。

「……」

克久は克久で、何を言っても、話題が音楽か大会の方向にそれていきそうで閉口だった。

「これ、うまいね」

こういうことを言う時の調子は夫の久夫が百合子の機嫌を取るのに似ていた。ぼそつと言ってから、少し遅れてにやりと笑うのだ。

「西瓜でも切ろうか」

久夫に似てきたが、よく知っている克久とは別の少年がそこにいるような気もした。

「……」

西瓜と言われれば、すぐ、うれしそうにする小さな克久はもうそこにいない。

「……」

百合子は西瓜のことを聞こうとして、ちよつとだけ息子に遠慮した。彼は何かを考えていて、ただぼんやりとしていたわけではない。**D** 少年の中に育ったプライドはこんなふうには、ある日、女親の目の前に表れるのだった。

(注) 1 森勉——花の木中学校の音楽教師。吹奏楽部の顧問をつとめている。部員たちからは「ベンちゃん」と呼ばれている。

2 「くじやく」——ハンガリーの作曲家コダーイがハンガリー民謡「くじやく」の旋律をもとに作った曲。

3・4 鈴木女史・有木部長——ともに吹奏楽部の上級生。

5 「父響的譚詩」——日本の作曲家露木正登（まさと）が吹奏楽のために作った曲。

6 克久の胸のうさぎ——克久が、自分の中にと感じている「うさぎ」のこと。克久は、小学校を卒業して間もなく花の木公園でうさぎを見かけて以来、何度かうさぎを見つけては注意深く見つめていた。吹奏楽部に入った克久は、いつの間にか一羽の「うさぎ」が心に住み着き、耳を澄ましてるように感じ始めていた。

7 百合子——克久の母。夫の久夫は転勤したため、克久とふたりで暮らしている。

8 銀行に申し入れた融資——伊万里焼の磁器を扱う店を出すため、百合子が銀行に借り入れを申し入れた資金のこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア) いわく言い難い

12

- ① 言葉にするのが何となくはばかられる  
 ② 言葉では表現しにくいと言うほかはない  
 ③ 言葉にしてしまつてはまつたく意味がない  
 ④ 言葉にならないほどあいまいで漠然とした  
 ⑤ 言葉にするとすぐに消えてしまふような

(イ) 和声理論の権化

13

- ① 和声理論で厳しく律せられた演奏  
 ② 和声理論で堅固に武装した演奏  
 ③ 和声理論を巧みに応用した演奏  
 ④ 和声理論を的確に具現した演奏  
 ⑤ 和声理論にしっかりと支えられた演奏

(ウ) みもふたもない

14

- ① 現実的でなくどうにもならない  
 ② 大人気なく思いやりがない  
 ③ 露骨すぎて話にならない  
 ④ 計算高くてかわいげがない  
 ⑤ 道義に照らして許せない

問2 傍線部A「音が音楽になろうとしていた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 指揮者の指示のもとで各パートの音が融け合い、具象化した感覚や純化した感情を克久に感じさせ始めたこと。
- ② 指揮者に導かれて克久たちの演奏が洗練され、楽曲が本来もっている以上の魅力を克久に感じさせ始めたこと。
- ③ 練習によって克久たちの演奏が上達し、楽曲を譜面通りに奏でられるようになったと克久に感じさせ始めたこと。
- ④ 各パートの発する複雑な音が練習の積み重ねにより調和し、圧倒するような迫力を克久に感じさせ始めたこと。
- ⑤ 各パートで磨いてきた音が個性を保ちつつ精妙に組み合わせさり、うねるような躍動感を克久に感じさせ始めたこと。

問3

傍線部B「怒られるたびに内心で『ちゃんとやっつてるじゃないか』とむくれていた気持ちがつつかり消えた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 日々の練習をきちんと積み重ねているつもりでいた一年生だったが、地区大会で他校の優れた演奏を聴いて、めざすべき演奏のレベルが理解できたと同時に、まだその域に達していないと自覚したから。
- ② 地区大会での他校の演奏を聴いて自信を失いかけた一年生だったが、演奏を的確に批評するOBたちが自分たちの演奏を音に厚みがあると評価したので、あらためて先輩たちへの信頼を深めたから。
- ③ それまでばらばらだった自分たちの演奏が音楽としてまとまる瞬間を地区大会で初めて経験した一年生は、音と音楽との違いに目覚めると同時に、自分たちに求められている演奏の質の高さも実感したから。
- ④ 地区大会で他校のすばらしい演奏を聴いて刺激を受けた一年生は、これからの練習を積み重ねていくことで、音楽的にさらに向上していこうという目標を改めて確認し合ったから。
- ⑤ 自分たちとしては十分に練習してきたつもりでいた一年生だったが、地区大会での他校の堂々とした演奏を聴き、自信をもって演奏できるほどの練習はしてこなかったと気づいたから。

問4

傍線部C「初めて会った恋人同士のよう」とあるが、この表現は百合子と克久のどのような状態を言い表したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 自分の好意を相手にきちんと言えたいと願っているのに、当たり障りのない話題しか投げかけられず、もどかしく思っている。
- ② 互いのことをよくわかり合っているはずなのに、相手を前にしてどのように振る舞えばよいかわからず、とまどっている。
- ③ 本当は心を通い合わせたいと思っているのに、話をしようとするとも照れくささからそっけない態度しかとれず、悔やんでいる。
- ④ 相手の自分に対する気配りは感じているのに、恥ずかしくてわざと気付かないふりをしてしまい、きまり悪さを感じている。
- ⑤ なごやかな雰囲気を保ちたいと思って努力しているのに、不器用さから場違いな行動を取ってしまい、笑い出したくなっている。

問5 傍線部D「少年の中に育ったプライドはこんなふうには、ある日、女親の目の前に表れるのだ」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 充実した練習を通して自ら育<sup>はぐ</sup>んできた克久のプライドは、県大会に向けての克久の意気込みと不安を百合子に感じさせるものであった。このプライドは張り詰めて折れそうな心を自覚しながら独り大会に備える自立した少年の姿を通して不意に百合子の前にあらわれ、幼いと思っていた息子が知らないうちに夫に似てきたことを百合子に感じさせた。
- ② 仲間たちとの交わりの中で自ら育んできた克久のプライドは、仲間への信頼と自分がかけがえのない存在であるという自覚を百合子に感じさせるものであった。このプライドは自らの緊張感を百合子に悟らせまいとしている大人びた少年の姿を通して不意に百合子の前にあらわれ、息子の成長に対する喜びを百合子に感じさせた。
- ③ 努力を重ねるなかで自ら育んできた克久のプライドは、克久のおごりと油断を百合子に感じさせるものであった。このプライドは他人を寄せつけないほどの緊張を全身にみなぎらせている少年の姿を通して不意に百合子の前にあらわれ、大会を前にした息子の気負いをなだめ、落ち着かせなければならぬという思いを百合子に感じさせた。
- ④ 吹奏楽部の活動に打ち込むなかで自ら育んできた克久のプライドは、りりしさともろさを百合子に感じさせるものであった。このプライドは高まった気持ちを静かに内に秘めた少年の姿を通して不意に百合子の前にあらわれ、よく知っている克久の姿とともに、理解しているつもりでいた克久ではない成長した少年の姿も百合子に感じさせた。
- ⑤ 同じ目的を持つ仲間たちとの協力を通して自ら育んできた克久のプライドは、どんなことにも動じない自信と気概を百合子に感じさせるものであった。このプライドは百合子を遠慮させるほど堂々とした少年の姿を通して不意に百合子の前にあらわれ、克久がこれまでとは別の少年になってしまったという錯覚を百合子に感じさせた。



問6 この文章の叙述の説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は

19

20

- ① 本文では、「スゴイ学校は他にいくらでもあった」「スゲエナ」「サムイ」などをカタカナで表記することで、これらの表現に話し言葉らしさや若者言葉らしさを与えている。
- ② 百合子と克久の会話文で多用されている「……」は、適当な言葉を見つけれなくて会話を続けられないでいる二人の様子を効果的に表現している。
- ③ 本文では、県大会の前日までのできごとが克久の経験した順序で叙述されており、このことによつて登場人物の心情の変化が理解しやすくなっている。
- ④ 本文15ページには比喩を用いて音楽を表現している部分がある。そこでは、「大海原のうねりのような音」といった直喩だけを用いて隠喩を用いないことで、音楽の描写をわかりやすいものにしてしている。
- ⑤ 本文16ページの「昨日まで、鳥の鳴き声く今日はちゃあんと人間の話し声に聞こえる」の文末が現在形になっていることで、OBたちの話を聞いたときの克久に読み手がより共感しやすくなっている。
- ⑥ 本文16ページの地区大会の後で克久が帰宅した場面では、あえて「恐竜と宇宙飛行士」といった大げさな対比を用いることによつて、母親と息子のずれの大きさを強調している。

第3問 次の文章は、『恋路ゆかしき大将』の一節で、恋路大将が大風の吹いた翌朝に参内する場面である。これを読んで、後の

問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

暁方に **a** なるままに、おびたたしう吹きまさりたる風の紛れに、いと疾う内裏へ参り給ひぬ。「今宵は中宮の御宿直なりけるが、下りさせ給ひけるままに、上は藤壺にわたらせ給ふ」と聞こゆれば、そなたさまへ参り給ふに、立て蒔など、よろづの所あらはに、例ならず見わたされて、姫宮の御方の御小壺の叢に、童へ下りて、虫屋ども手ごとに持たり。御覧すると、二宮の御簾を高くもたげさせ給へるに、十一、二ばかりにやと見ゆる御丈立ちにて、うつぶきて立ち給へれば、前へ靡き掛かれる御髪(注1)の削ぎめふさやかに、絵に描きたらん心地して、まみ・額・髪(注2)ざし、かの雪の朝の御面影(注3)なるものから、なほけしき異にて(注4)気高う、匂ひも類なき御さまは、姫宮にこそはおはしますめ。よろづのことに騒がず鎮まる御心も、ただ今はいかがはあらん、深く心騒ぎして、おどろかれ給ふ。我が上の空にももの憂く浮きたつ心は、この御さまなどを朝夕見奉らんには慰めなんかし、さりとして当時、世の常に思ひ寄るべき御年のほどならねど、**(ア)** ただまぼり奉らまほしきに、「あはれ、雛屋に虫のゐよかし。一つにあらば、いかに嬉しからん」とのたまへば、二宮、「あらわろや。苔や露も入れさせ給はば、雛のため、いかにうつくしからん」と笑ひ聞こえ給へば、げにと思したるさまにて、**(イ)** まめだち給へる御まみのわたり、見る我もうち笑まれて、幾千代まぼるとも飽く世あるまじきに、おとなしき人参りて引き直しつれば、口惜しうて歩み過ぎ給ふ。

A 宮城野にまたうら若き女郎花移して見ばやおのが垣根に(注5)

参り給へれば、夜もすがら風に萎れける前裁御覧じて、端つ方におはします。女御は、いと薄き蘇芳に吾亦紅の織物ひき重ねて奉れる御さまの、ありつる御面影ふと思ひ出でらるるも、なつかしき心地すれど、殊に見やり奉らぬさまなり。朝顔の枝を持給へりけるを、御前に参らせ給ふ。(注6)(注7)

B 朝顔の朝露(注8)ごとに開くれば秋は久しき花とこそ見れ上、「おのづ(注8)から榮(えい)を為(な)す」とうち誦(ずん)じさせ給ひて、

C 千年(ちとせふ)経る松にたとふる朝顔のげにぞ盛りの色は久しき

大將は、ありし御面影の身を去らぬままに、奈良にこそこまかなる細工はあん(c)なれと、召し集(じ)へたるに、虫も雛も一つにて濡(ぬ)れて苦しみあるまじきさまにしつらはせ給へる雛屋のさま、御心の際(きは)、そこひなくめづらかなり。雛多く人に作らせて据(た)ゑ給ひつつ、藤壺に奉らせ給ふ。「思ひかけず人の賜(たま)ひて待(は)てるを、参るべき御方もやとてなん。上の見参(げさん)にも入れさせ給へ」と、  
(注9) 「大納言の君と上書きして奉り給ふ。物の端に、  
(注10) 玉の台の家居をぞする

D 松虫の千年の例(た)しあらはれて玉の台の家居(いへみ)をぞする

上もこの御方にて、もて興(おこ)せさせ給ふに、中納言(注11)の乳母(めのと)、「これは、野分(のわき)の朝願はせ給ひしものになん侍る。『世の中あらはに侍りしに、二宮の御簾をもたげさせ給ひしに、つくづくと見入れて立ち給へりし』と、後に人の申し侍りしは、まことなりけり」と聞こゆるを、  
X 上、いとも興あり、えならぬことに思されて、笑み入らせ給ふ。さりとも世の常におどろかれぬ数には思はじものを。いかで心動かさするわざせんと、なべてかなはぬ世も怨(うら)めしきに、これをさも思ひ聞こえんはおもしろきこと、と思さるるぞ、めづらしき人の御癖なる。御返し、上、

E 雲居なる千代松虫ぞ宿るべき君が磨ける玉の台に

事しもこそあれ、いつしかねぢけたる御祝(こと)ひ言なりや。待ち見給ふ御心地は、顔うち赤みて、いとど身のほど心おごりし、上の御(注12)ならはし・御心ざしをぞ、この世のみならず思ひ続け給ふ。

我が御殿の三条院のおほかたの寝殿にはあらで、また磨き造らるる西面(にしおもて)に、九間(ま)ばかりなる所に、雛屋を作り続けて、  
(注13) 九重の中の有様、旧(ふる)き名所名所も、変はらず写し作らせ給ふとて、指図(注14)よ何よと、これよりほかのことなくしつらひ置かせ給ふを、「何(い)ごとぞや」と、  
(ウ) つきしろひ煩ひ聞こえけり。我が御心地にも、そぞろなることかなとをかし。

F 我ながら言ふかひなやと思ふかな野なる虫にも宿を占めさす

かつはをこがましう、かかるいたづらごとのし置かるるも、上の空なる心化粧(注15)なり。その年も暮れぬ。

(注) 1 小壺——小さな中庭。

2 虫屋——虫かご。

3 かの雪の朝の御面影——昨年の冬、帝みかどは藤壺女御の姿を恋路大将が見るようにしむけたことがあった。

4 当時——現在。

5 宮城野——宮城県仙台市東部の平野。ここでは、宮中の意味が込められている。

6 蘇芳——黒みがかつた赤色。

7 吾亦紅——秋に暗紅紫色の小花をつける草。ここでは、それをかたどつた織物の模様。

8 おのづから栄を為す——「松樹千年終つひに是これ朽ちぬ 槿花きんくわ一日おひつか自ら栄を為す」〔和漢朗詠集〕秋・槿あさがお・白居易の一節。

9 大納言の君——藤壺女御付きの女房。

10 玉の台——豪華な建物のこと。

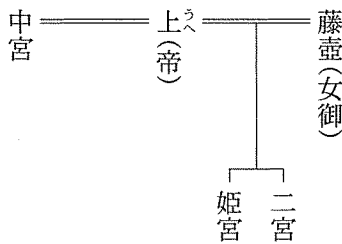
11 中納言の乳母——姫宮の乳母。

12 御ならはし——恋路大将に対する帝のお引き立て。

13 九重——宮中のこと。

14 指図——見取り図。ここでは、雛屋の図面のこと。

15 心化粧——相手によく見られようと、自分の言動や容姿に気を配ること。



問1 傍線部(ア)く(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①く⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

く

23

(ア) ただまぼり奉らまほしきに

21

- ① 恋路大將は二宮・姫宮の兄妹を後見していらつしやつたが
- ② 姫宮が雛屋を一途いちずに見つめ続けていらつしやると
- ③ 恋路大將は姫宮をしっかりとお守り申し上げたが
- ④ 恋路大將は姫宮をひたすら見つめ申し上げたく思っている
- ⑤ 二宮は妹の姫宮を何とかお守り申し上げたいと願っていたが

(イ) まめだち給へる御まみのわたり

22

- ① 本気になつていらつしやる御顔つき
- ② 正直さをあらわしていらつしやる御まなざし
- ③ 真面目まじめな顔をなさっている御目もと
- ④ お健やかな様子がうかがわれる御表情
- ⑤ 懸命さを漂もよほわせておられる眉間みげんの御様子

(ウ) つきしろひ煩ひ聞こえけり

23

- ① 白い目を向けて、非難申し上げていた
- ② つつきあつて、面倒なことと思ひ申し上げていた
- ③ 声をひそめあつて、うわさ話をなさっていた
- ④ 迷惑がつて、耳障りなこととお聞きになった
- ⑤ 頭を寄せあつて、嘆き申し上げていた

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |   |            |           |            |            |
|---|------------|-----------|------------|------------|
| ① | a 動詞       | b 断定の助動詞  | c 伝聞推定の助動詞 | d 形容動詞の一部  |
| ② | a 伝聞推定の助動詞 | b 断定の助動詞  | c 動詞       | d 断定の助動詞   |
| ③ | a 動詞       | b 形容動詞の一部 | c 断定の助動詞   | d 伝聞推定の助動詞 |
| ④ | a 動詞       | b 形容動詞の一部 | c 伝聞推定の助動詞 | d 形容動詞の一部  |
| ⑤ | a 伝聞推定の助動詞 | b 動詞      | c 断定の助動詞   | d 形容動詞の一部  |

問3 傍線部X「上、いとも興あり、えならぬことに思されて、笑み入らせ給ふ」とあるが、帝が「笑み入らせ給」うたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 常日ごろは真面目な恋路大將が姫宮をのぞき見するという行動に及んだことを、情けなく意外に思ったため。
- ② 数多い娘の中でも目立たない姫宮が前途有望な恋路大將に気に入られたことを、嬉しく思ったため。
- ③ いつも落ち着いている恋路大將が姫宮に強く惹かれるようになったことを、喜ばしく満足に思ったため。
- ④ 恋路大將に姫宮をのぞき見させるといふ戯れの計画が思い通りに運んだことを、おもしろく愉快に思ったため。
- ⑤ 雛遊びに夢中で幼く見える姫宮が恋路大將にあこがれの思いを抱いていることを、ほほえましく思ったため。

問4 A～Fの歌に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

① Aの「女郎花」は姫宮のたとえであり、「宮城野」から「おのが垣根」にそれを移してみたいというのは、恋路大将の、姫宮を宮中から我が邸に迎えとりたいという願望を表している。

② B・Cの歌のやりとりでは、Bがはかない「朝顔」の花を毎朝咲くことから「久しき花」ととらえ直して帝への祝意を込めたのに対して、Cでは「朝顔」を恋路大将にたとえて、その美しさを讃えている。

③ Dは、Cの「松」を受けて「松虫」を詠み込む。Dの「玉の台」には、姫宮に贈られた人形の家がたとえられており、「玉の台」に住む「松虫」にもまして、姫宮が栄えるようにという恋路大将の気持ちが込められている。

④ Eの「玉の台」は恋路大将の邸を示し、「雲居」すなわち宮中からそこに移り住むことになる「松虫」は姫宮のたとえであり、直接の歌のやりとりではないものの、Aに込められた恋路大将の願望が受け入れられたことを示している。

⑤ Fの「言ふかひなや」の「ひなや」には「雛屋」が掛けられており、身分の高い姫宮を「雛屋」のような小さな邸に迎えることについてふがいなく思う恋路大将の気持ちが込められている。



問5 この文章を通して、傍線部Y「かつはをこがましう、かかるいたづらごとのし置かるるも、上の空なる心化粧なり」にいたる恋路大将の心情の変化の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27

① 恋の思いに動かされることもなかった心が、姫宮の姿を見てからは落ち着かず、その面影を忘れることができなくなってしまった。姫宮の気を引くために贈り物に心を砕いているが、夢中になる一方で、それを我ながら馬鹿<sup>ばか</sup>げているとも思っている。

② 恋にあこがれて落ち着かずうわついていた心が、姫宮の姿を見てからはその面影を一途に追い求めるようになってしまった。姫宮の気を引くために贈り物に心を砕いているが、熱心に取り組んでいる一方で、我ながらその熱意を不思議だとも思っている。

③ 恋の思いに漠然と浮かれていた心が、姫宮の姿を見てからは許されない恋に苦しめられるようになってしまった。姫宮の気を引くために贈り物に心を砕いているが、夢中になる一方で、我ながらその恋に罪悪感を抱き、帝に申し訳ないとも思っている。

④ 藤壺女御への恋を奥に秘めて沈んでいた心が、姫宮の姿を見てからはその面影を忘れられず、落ち着かない状態になってしまった。姫宮の気を引くために贈り物に心を砕いているが、熱心に取り組んでいる一方で、女御への裏切りを我ながら情けないとも思っている。

⑤ 藤壺女御への恋に浮かれていた心が、姫宮の姿を見てからはますますその母である女御を一途に思いつめるようになってしまった。女御の気を引くために姫宮への贈り物に心を砕いているが、真剣に取り組んでいる一方で、それを我ながらじれったいとも思っている。

問6 この文章の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

28。

- ① 恋路大將が参内した時、女房が、「昨夜帝は中宮のところにお泊まりになりましたが、今朝こちらにお戻りになつてから藤壺女御のところへお出かけになりました」と語つた。
- ② 「お人形のところに虫がいるといいのに」という姫宮の言葉を、「虫を入れるなら苔や露も必要になり、見苦しくなつてしまふからやめなさい」と二宮が打ち消した。
- ③ 恋路大將は、わざわざ奈良から呼び集めた細工職人が作つた贅ぜいたく沢な人形の家が、虫を入れたために濡れてしまつても、たいして苦にしていないうようにふるまつていた。
- ④ 恋路大將は、たまたま人からもらつた人形の家を誰だれにあげればよいのか思いあぐねて、最終的には大納言の君に相談し、姫宮に差し上げることにした。
- ⑤ 恋路大將は、自分の邸の美しく磨き上げて造つた室内に、人形用の家を次々と作り、宮中の様子や名所の風情をもそっくりそのままに作らせようとした。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

世<sup>(注1)</sup>之<sup>(注2)</sup>学<sup>(注3)</sup>者、動<sup>(注4)</sup>以<sup>(注5)</sup>杜<sup>(注6)</sup>詩<sup>(注7)</sup>為<sup>(注8)</sup>難<sup>(注9)</sup>解<sup>(注10)</sup>、不<sup>(注11)</sup>肯<sup>(注12)</sup>一<sup>(注13)</sup>過<sup>(注14)</sup>目<sup>(注15)</sup>。所<sup>(注16)</sup>以<sup>(注17)</sup>呻<sup>(注18)</sup>哦<sup>(注19)</sup>者、非<sup>(注20)</sup>

宋<sup>(注4)</sup>・明<sup>(注5)</sup>即<sup>(注6)</sup>晚<sup>(注7)</sup>唐<sup>(注8)</sup>。詎<sup>(注9)</sup>知<sup>(注10)</sup>薰<sup>(注11)</sup>染<sup>(注12)</sup>既<sup>(注13)</sup>深<sup>(注14)</sup>、後<sup>(注15)</sup>雖<sup>(注16)</sup>欲<sup>(注17)</sup>進<sup>(注18)</sup>乎<sup>(注19)</sup>杜<sup>(注20)</sup>也<sup>(注21)</sup>。可<sup>(注22)</sup>得<sup>(注23)</sup>乎<sup>(注24)</sup>。

說<sup>(注6)</sup>者<sup>(注7)</sup>謂<sup>(注8)</sup>学<sup>(注9)</sup>者<sup>(注10)</sup>、当<sup>(注11)</sup>登<sup>(注12)</sup>高<sup>(注13)</sup>自<sup>(注14)</sup>卑<sup>(注15)</sup>、不<sup>(注16)</sup>可<sup>(注17)</sup>躡<sup>(注18)</sup>等<sup>(注19)</sup>。此<sup>(注20)</sup>言<sup>(注21)</sup>近<sup>(注22)</sup>是<sup>(注23)</sup>而<sup>(注24)</sup>非<sup>(注25)</sup>、道<sup>(注26)</sup>

有<sup>(注1)</sup>不<sup>(注2)</sup>同<sup>(注3)</sup>故<sup>(注4)</sup>也。如<sup>(注5)</sup>上<sup>(注6)</sup>泰<sup>(注7)</sup>山<sup>(注8)</sup>、由<sup>(注9)</sup>梁<sup>(注10)</sup>父<sup>(注11)</sup>而<sup>(注12)</sup>登<sup>(注13)</sup>、此<sup>(注14)</sup>之<sup>(注15)</sup>謂<sup>(注16)</sup>自<sup>(注17)</sup>卑<sup>(注18)</sup>。若<sup>(注19)</sup>歷<sup>(注20)</sup>鳧<sup>(注21)</sup>・

繹<sup>(注1)</sup>而<sup>(注2)</sup>冀<sup>(注3)</sup>造<sup>(注4)</sup>日<sup>(注5)</sup>觀<sup>(注6)</sup>之<sup>(注7)</sup>巔<sup>(注8)</sup>、跡<sup>(注9)</sup>之<sup>(注10)</sup>愈<sup>(注11)</sup>勞<sup>(注12)</sup>、去<sup>(注13)</sup>之<sup>(注14)</sup>愈<sup>(注15)</sup>遠<sup>(注16)</sup>矣<sup>(注17)</sup>。

然<sup>(注1)</sup>則<sup>(注2)</sup>学<sup>(注3)</sup>杜<sup>(注4)</sup>者<sup>(注5)</sup>、当<sup>(注6)</sup>何<sup>(注7)</sup>如<sup>(注8)</sup>而<sup>(注9)</sup>可<sup>(注10)</sup>。余<sup>(注11)</sup>曰<sup>(注12)</sup>、檢<sup>(注13)</sup>杜<sup>(注14)</sup>之<sup>(注15)</sup>五<sup>(注16)</sup>律<sup>(注17)</sup>、中<sup>(注18)</sup>浅<sup>(注19)</sup>近<sup>(注20)</sup>易<sup>(注21)</sup>

明<sup>(注1)</sup>者<sup>(注2)</sup>、如<sup>(注3)</sup>天<sup>(注4)</sup>河<sup>(注5)</sup>、螢<sup>(注6)</sup>火<sup>(注7)</sup>、初<sup>(注8)</sup>月<sup>(注9)</sup>、画<sup>(注10)</sup>鷹<sup>(注11)</sup>、端<sup>(注12)</sup>午<sup>(注13)</sup>、賜<sup>(注14)</sup>衣<sup>(注15)</sup>、詠<sup>(注16)</sup>物<sup>(注17)</sup>等<sup>(注18)</sup>、篇<sup>(注19)</sup>反<sup>(注20)</sup>復<sup>(注21)</sup>尋<sup>(注22)</sup>

繹<sup>(注1)</sup>、心<sup>(注2)</sup>目<sup>(注3)</sup>自<sup>(注4)</sup>明<sup>(注5)</sup>、門<sup>(注6)</sup>戸<sup>(注7)</sup>不<sup>(注8)</sup>患<sup>(注9)</sup>其<sup>(注10)</sup>不<sup>(注11)</sup>望<sup>(注12)</sup>見<sup>(注13)</sup>也<sup>(注14)</sup>。由<sup>(注15)</sup>此<sup>(注16)</sup>而<sup>(注17)</sup>進<sup>(注18)</sup>、歷<sup>(注19)</sup>階<sup>(注20)</sup>升<sup>(注21)</sup>堂<sup>(注22)</sup>、

殆<sup>ほとんど</sup>有<sup>ラン</sup>期<sup>ラン</sup>矣。

(黄子雲『野鴻詩的』による)

- (注)
- 1 世之学者——近ごろの、学問・文芸を修めようとする人。
  - 2 杜甫——唐代の詩人、杜甫トハの詩。唐代の詩は、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四つの時期に区分され、杜甫は盛唐の詩人。
  - 3 啾哦——吟詠する。朗唱する。
  - 4 宋・明——ここでは、宋代・明代の詩を指す。
  - 5 薰染——影響を受けること。
  - 6 説者——説を述べる人。論者。
  - 7 躡等——段階を飛び越えること。
  - 8 泰山——山東省にある名山。
  - 9 梁父——泰山の麓ふもとにある低い山。
  - 10 鳧・繹——鳧山と繹山。ともに泰山から見て遥はるか南にある低い山。
  - 11 日觀——日觀峰。泰山の最も高い峰の一つ。
  - 12 五律——五言律詩。なお、「天河」より「端午賜衣」までは、杜甫の「詠物」詩(具体的な物を詠じた詩)の作品名。
  - 13 尋繹——探究する。

問1 傍線部(1)「動」・(2)「是」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答  
 番号は 29 ・ 30 。

(1)

29 「動」

- ⑤ まれに  
 ④ とかく  
 ③ いやしくも  
 ② みだりに  
 ① いきなり

(2)

30 「是」

- ⑤ 正しいこと  
 ④ あらゆること  
 ③ 離れていること  
 ② 似ていること  
 ① このこと

問2 傍線部A「詎知、薰染既深、後雖欲進乎杜、也可得乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けていることを知っているので、のちに自分から杜詩を学ぼうとはしないのだ。
- ② 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてはいても、のちに杜詩を学べばまた得るところがあるのを知らないのだ。
- ③ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっているが、のちに杜詩を学ぼうとするのに何の妨げもないことを知らないのだ。
- ④ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっていることを知らないのだ、のちに杜詩を学ぼうとしても、もはや得るところはないのだ。
- ⑤ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっているのだ、のちに杜詩を学ぼうとしても、もはやできなくなっていることを知らないのだ。

問3

第二段落で、筆者は詩を学ぶことを山に登ることに喩<sup>たと</sup>えているが、それぞれの対象として挙げられているものの対応関係を次のような表にまとめた場合、空欄Ⅰ～Ⅲに入るべき語の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

Ⅰ	杜 詩
Ⅱ	杜詩の中の「天河」「螢火」 「初月」「画鷹」「端午賜衣」 などの作品
Ⅲ	宋・明・晩唐の詩

- |   |   |     |   |     |   |     |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|
| ⑤ | Ⅰ | 泰山  | Ⅱ | 梟・繹 | Ⅲ | 梁父  |
| ④ | Ⅰ | 梁父  | Ⅱ | 泰山  | Ⅲ | 梟・繹 |
| ③ | Ⅰ | 泰山  | Ⅱ | 梁父  | Ⅲ | 梟・繹 |
| ② | Ⅰ | 梟・繹 | Ⅱ | 梁父  | Ⅲ | 泰山  |
| ① | Ⅰ | 梁父  | Ⅱ | 梟・繹 | Ⅲ | 泰山  |



問4 傍線部B「然則学<sub>レ</sub>杜者当<sub>二</sub>何如<sub>一</sub>而可<sub>レ</sub>」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の

①く⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 33 ・ 34。

(i) 書き下し文

33

- ① 然らば則ち杜を学ぶ者は何れのごときに当たればすなは而ち可ならんや
- ② 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何如ぞ而ち可とせんや
- ③ 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何れのごとくにすべくんば而ち可なり
- ④ 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何如なるべくんば而ち可なるか
- ⑤ 然らば則ち杜を学ぶ者は何如に当たりて而ち可ならんか

(ii) 解釈

34

- ① それならば、杜詩を学ぶ者はいったいどのようなのであればいいのであろうか。
- ② そうではあるが、杜詩を学ぶ者はどうしたらいいのかわかっているのであろうか。
- ③ それならば、杜詩を学ぶ者はどのようなときに対処できるのであろうか。
- ④ そうではあるが、杜詩を学ぶ者は本当にどのようなことも可能になるのだ。
- ⑤ さまなければ、杜詩を学ぶ者はどのようなときにも実力を発揮できないのではないか。

問5

次に示したのは、波線部「杜之五律」の一例として挙げられた「萤火」の詩とその現代語訳である。本文の主旨を踏まえ、たこの詩の解説として最も適当なものを、次ページの①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35

萤火

螢の光

幸<sup>もとヨリ</sup>因<sup>ヨリ</sup>腐<sup>ク</sup>草<sup>ノ</sup>出<sup>ツ</sup>

螢はもともと腐敗した草から生まれ出るもの、

敢<sup>ヘテ</sup>近<sup>ツキテ</sup>太<sup>ニ</sup>陽<sup>ニ</sup>飛<sup>バンキヤ</sup>

どうして太陽などに向かって飛んだりしようか。

未<sup>ダ</sup>足<sup>ラ</sup>臨<sup>ム</sup>書<sup>ニ</sup>卷<sup>ニ</sup>

ほのかな光は書物を読むには役立たないが、

時<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>点<sup>テンズ</sup>客<sup>ニ</sup>衣<sup>ニ</sup>

時には旅人である私の衣にとまり光を灯す。

随<sup>したがヒテ</sup>風<sup>ニ</sup>隔<sup>テテ</sup>幔<sup>とぼりラ</sup>小<sup>サク</sup>

風に乗つてとぼりの向こうに飛んでいっては小さく見え、

帯<sup>ビテ</sup>雨<sup>ヲ</sup>傍<sup>ソヒテ</sup>林<sup>ニ</sup>微<sup>カサリ</sup>

雨にぬれて林の方へ向かつていってはかすかな光を発する。

十<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>清<sup>ク</sup>霜<sup>ニ</sup>重<sup>シ</sup>

冬十月の冷たい霜も繁くなるころ、

飄<sup>ヘウ</sup>零<sup>れいシテ</sup>何<sup>イツレノ</sup>処<sup>ニカ</sup>帰<sup>キスル</sup>

衰え弱つてどこに行くのだろうか。

① この詩は、蛍が人間の幸福になにも寄与しないことを批判的に描写しており、そこに作者の自らへの戒めとする態度が読み取れる。このような、身近な題材を用いつつ表現意図が明確に示された詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

② この詩は、蛍が人々にとって身近な存在であることを修辭を凝らして描写しており、そこに作者自身のあこがれも表現されている。このような、身近な題材を用いつつすぐれた技巧が生きている詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

③ この詩は、蛍が生まれた所に戻ろうとしない無情なさまを客観的に描写しており、そこに作者の望郷の思いが図らずも浮き彫りにされている。このような、身近な題材を用いつつ叙情性も備えた詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

④ この詩は、蛍のか弱い生態を様々な角度から同情的に描写しており、そこに作者自身の消極的な人生態度も自然に吐露されている。このような、身近な題材を用いつつ複雑な情緒を表現している詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

⑤ この詩は、蛍の寄る辺なくさまようさまを多様な角度から描写しており、そこに作者自身の旅人としての姿も投影されている。このような、身近な題材を用いつつ平易でかつ内容に奥行きのある詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

問6 傍線部C「由<sub>レ</sub>此而進、歴階升堂、殆有<sub>レ</sub>期矣」からうかがわれる筆者の主張を説明したものととして最も適当なものを、次の①く⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 山に登る場合、下から一歩ずつ着実に登ることが大切だが、学問・文芸を修めようとする場合も、この原則を守れば高度な作品を避けて始めたとしても順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。
- ② 山に登る対象を誤ると高い頂上にたどり着けなくなるので、学問・文芸を修めようとする場合も、人々から注目されている分野を選んで着実に始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。
- ③ 山にもさまざまな高さのものがあるように、学問・文芸を修めようとする場合も、どれを対象として選択してもよく、初歩から一歩ずつ着実に始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。
- ④ 山に登る場合も学問・文芸を修めようとする場合も、選ぶ対象が重要であつて、どちらも高い目標を選択して、その低いところから着実に進み始めてこそ順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。
- ⑤ 山の頂上にたどり着くにはなるべく安全な道を選ぶべきで、学問・文芸を修めようとする場合も、同様に基礎的でありやすい内容のものから始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。